

兼題

「初」はつ

神棚じんたな 爺じさんに供まげた 初月はつげつき給たまひ

(唱) 爺じ様さまん遺影いゑが にここっち笑わるつ

諸木小春

初はつデート 終しめ際ぎうえやつと 手てを握にぎつ

(唱) 待まちっちよつた態ぶで そつち手てを出でつ

上村牛歩

初はつ孫まごが 天てん国こくの父ちち親おやへ 可む愛あじ手て紙がみ

(唱) お利り巧こうさんち 喜よろくじよい亡な父ちち

藤元鬼瓦

やつたとち 花はな園ぞんが沸うた 初はつトライ

(唱) ラグビラグビーをし知したん 女か房か迄ずや大う騒そ動ど

西ノ園ひらり

新春句

詩うたはじめ

新年最初の特集は、郷句(薩摩狂句)です。

郷句(薩摩狂句)とは、社会や人情、日常生活で起こったことなど、人間社会を素材にして、鹿児島の方言を使い、さらに狂句味を加えた五・七・五の十七文字で表現する郷土文芸です。

薩摩狂句が誕生したのは、明治41年6月4日、鹿児島新聞(後の南日本新聞)の朝刊に6句掲載されたことが始まりだとされています。

今回は、町内で30年以上精力的に活動している「大崎郷句会」の皆さんに、新年にちなんで『初』という兼題で、句を詠んでいただきました。

今回の特集では、郷句(狂句)の成り立ちや魅力について特集したいと思います。

狂句から郷句へ

狂句は川柳から派生した文学でしたが、当初は下品なものとして見られていました。

しかし、伝統ある句会の一つである洪柿会の故三條風雲児先生が鹿児島弁を駆使し健全で明るい笑いやほのぼのとした人間味、さわやかで後味のよい風刺をもった品格のある庶民の詩という定義を打ち出し、ユニークな郷土文芸として発展し、多くの人々に愛されるものになりました。『狂句』の名称を平成8年4月から『郷句』に変更しました。

以来、大崎郷句会では、故三條風雲児先生の思いを継承し、皆さんで月1回の例会を開催し、郷土文芸としての郷句の研鑽に努めています。

